

「石橋いしばし（飛び石とび）・明日香川」

明日香川 明日も渡らむ

石橋の 遠き心は 思ほえ

ぬかも

作者 未詳 （卷十一—二七〇二）

（解説）この明日香川の石橋を渡って明日もお前に会いに行くよ。石橋の飛び間をおくように心が遠く離れた気持ちなどは持っていません。と恋情を示す歌である。

○万葉集では26首詠まれている「明日香川」は明日香村の南、隣接地にある高取の山を源流にして、栢森（かやのもり）・稲渕（いなふち）の集落を流れ下り、石舞台古墳に接する祝戸（いわいど）の集落あたりで多武峰（とうのみね）山麓に源を持つ冬野川（万葉時代は「細川」と合流し、飛鳥京をかすめ甘樫丘・雷丘の麓を巡り大和三山の間を西北に流れて、やがて大和

川に注ぐ全長、約22.3kmの川である。

○明日香の街を抜けて明日香川沿いに上流の祝戸、稻渕、栢森へと山路に入る道は、「吉野の道」である。明日香から吉野へ通じる最短距離の道であった。

○この歌の「石橋」は吉野への道の途次にある奥明日香地域に位置する稻渕集落の中ほどに、「石橋」の標識がある。川岸に降りると10個ばかりの飛び石が並んでいる。これが、この歌の明日香川の石橋だ。

○明日香川の歌には、「石橋」と「打橋」の二種類の橋が登場する。

「石橋」は、大き目の自然石を浅瀬に並べただけのもので、稻渕集落に残る通称「飛び石」のようなものであったと言われている。「打橋（うちはし）」は、木製で常時掛けられているものでなく、必要に応じて岸と岸を結ぶために「打ち渡す」ことから打橋と呼ばれたようである。

●二種類の橋については柿本人麻呂（巻二―一九六）の長歌に次のように詠われている。

「飛鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 石橋渡し 下つ瀬に 打橋渡す。……」

即ち、明日香川の上流の瀬に飛び石を並べ渡し、下流の瀬に内

橋即ち板橋をかけ渡し。・・・と「石橋」と「板橋」が詠
われている。

(参考文献) 日本古典文学大系、新潮日本古典集成「万葉集」等

(写生地)

稲渚集落の中ほどの明日香川・河畔から下流にある飛鳥時
代の石橋(飛び石)と現代にかけられた橋を対比して描く。

(杏 花)

(明日香川の飛び石風景・明日香村稲渚)

